

特集

もつと社会へ目を向けよう

子どもたち

弱い立場であり、本来ならば守られるべき子どもたちが、つらい思い、あるいは命を失う等のような報道を見聞きする機会が増えています。

今回は、子どもたちの置かれている現状に目を向けたいと思い、静岡県袋井市にあるデンマーク牧場で子どもたちと日々向き合っている、まきばの家施設長の小久保さんに寄稿していただきました。

親と離れて暮らす子どもたち

児童養護施設まきばの家 施設長 小久保 秀樹

デンマーク牧場では、完全放牧された環境の中、牛たちはストレスなく生活しています。教会が主体となつて運営したフリースクール「こどもの家」の寮生とスタッフが力を合わせて乳牛をはじめ羊や馬などの飼育を続けてきました。

25年の歴史を刻んだフリースクールは、2007年3月に一旦休止しています。

しかしその理念と実践は、「社会福祉法人デンマーク牧場福祉会」が受け継ぎ、自立援助ホームをはじめ児童養護施設、児童精神科診療所、特別養護老人ホーム、そして就労継続支援B型の開設と、

時代の移り変わりとともに、その時々に必要なとされる形態を整えつつ、活動を続けています。

*

はじめに、法人の核となる「牧場」について記します。

現在もフリースクールの頃からの牧場の営みは続いており、自立援助ホームの寮生とスタッフが汗を流して働いています。夜が明けようとす早朝の5時半。眠い目をこすりながら、放牧地にいる搾乳牛を呼びに行き、搾乳室まで連れていきます。それぞれ名前の付いた牛の体調



を見ながら、ありがたくミルクを搾ります。搾った生乳は、65℃の30分間低温殺菌し、ホモジナイズ処理をしていない状態(クリーム層を取り出して混ぜればバターになります)で瓶に詰めていきます。

牛の糞掃除や給餌は、雨の日も風の日も365日続き、時には牛の疾病や出産や出荷などがあり、牧場の作業は、生き物相手なので手は抜けません。身体と頭を目いっぱい使う牧場作業では、寮生とスタッフが力を合わせることもあれば、激しく対峙することもあります。動物の命に触れ、自身の生き様に向き合い、自



＝牧場の作業＝ 干し草を運ぶため車に積み込む

然への畏敬の念を実感しながら、寮生とスタッフは、感性を擦り合わせています。

*

まきばの家では、定員30名の子どもたちが生活しています。様々な理由で、親と離れて暮らす子どもたち。はつきりとしていることは、まきばの家に来ることになったのは、すべて大人の都合です。本人の責任ではありません。

そして、学校に行けば、家族が待つている家に帰ることのできる友だちを羨ま

しく思いながら、まきばの家に帰ってくるのです。「どうして家に帰れないのか、なぜ親と一緒に暮らすことができないのか」は、成長するにつれて、うすうすはその理由をわかりながらも納得できている子どもはいません。

*

まきばの家では、子どもたちは互いに正義を語り、よく喧嘩をしています。

生活空間が一緒だからこそ気まずい関係のままではいられず、相手の立場に自分を置いて、他人を受け入れようと何度も繰り返します。スタッフが仲裁しようとして余計な一言を言おうものなら、「大人は正しいことばかり言おうとするよね」と一蹴されます。子どもの世界は、互いに折り合いながら育っているようです。

*

一方で、「生きづらいんだ」という子どもたちの叫びに、現場のスタッフは、たじろぎます。オブラートに包まない子どもの表現（ぐずり、暴言や暴力、無視をするなど）は、スタッフの人格を深くえぐり、常にスタッフ自身の生き方が問われています。

子どもよりも年を重ね、さも物分かり

がよく、薄っぺらい優しさを醸し出すスタッフがいたとすれば、子どもたちは相手にもしないでしょう。子どもも大人も結局のところ、摩擦がなくては、育ちはないのかもしれませんが。摩擦があるからこそ、相手のことをもつと知りたいたいと思

い、優しい心が育つのだと思います。 昨今、あえて人間関係を築かなくとも自分の興味があることだけで生活はできます。そんな結果として、モラルやエチケットへの意識が薄れ、自分にとつて都合の悪い人を排除したり尊厳を傷つけ合ったりしているのではないのでしょうか。

*

デンマーク牧場だからこそ、小さくまとまることなく、独自の展望が開かれていくように思います。

今はまだ思いつきませんが、真摯に子どもの声を聞いていくうちに、いずれ進むべき方向を教えられるような気がしています。

教会や地域、関係機関の方々に励まされ、背中を押していただきながら、心豊かに育ち合いたいと願っています。